

創立 145 周年記念式典

2024 年 11 月 30 日（土）会場 活水中学高等学校

院長・理事長 湯口隆司

145 周年を記念する記念礼拝に、在校生や学生、教職員と共に、ご来賓の皆様方、同窓会、PTA 並びに大学父母会の皆様がたに、参列を賜りころから御礼を申し上げます。

この 145 年間の間に、たくさんの活水卒業生の方々はお一人お一人が思い出と感慨を胸に天国へと旅立たれました。教師や友人との出会い、うれしいばかりでなく辛く悲しい青春の思い出もありましたが、多くの方々が神さまの恵みと平安のなかで天国にいま憩われているとただいまの吹奏楽の素晴らしい演奏を聞きつつ確信いたしました。

生徒・学生時代、つまり 10 代の思い出は決して色あせない自分の存在・原点をなす大切な道標です。本日は活水卒業生の手記を通して、活水で学んだこと、経験したことは何だったのかを皆さんと分かち合いたいと思います。

エリザベス・ラッセル、ジェニーギールの両宣教師が一人の成人女性を迎えて活水の教育を始めたのは 1879 年 12 月 1 日（月）でした。ラッセル先生はその後 30 数年間、校長として活水に係りました。第二代校長は 1898 年に着任したマリアナ・ヤング先生です。教育勅語（1890 年）、また文部省訓令第 12 号（1899 年）により、キリスト教学校は学内の宗教教育や儀礼行為が禁止された時の校長です。活水が正規の高等女学校とならずに活水女学部（専門学校）に甘んじたのは、学内の礼拝と教科として聖書を選択したためでした。ヤング先生時代には 140 人から 160 人ほどの生徒が在籍していました。

さて最初に紹介するのはヤング校長時代の 1917 年卒業の深江（旧姓小川）晴子さんの手記です。

「大正 3 年（1914 年）私が活水の神学部に入學した時は、神学生は全部で 4 人でした。校長はヤング先生で神学部長はメルトン先生でした。先生の講義は英語でしたので、高森先生と柏木先生が通訳をしてくださいました。私が三年生になった春、メルトン先生は急性肺炎で逝去され、深い悲しみを受けました。その後ラッセル先生が御自ら進んで私たちの先生になってくださいました。ラッセル先生はご自分の給料を割いて別のところで、気の毒なかいの子女を集めてお世話をしておられ、そのためにご自分の身の回りなど構わないでレインコートなど古びてみすぼらしいほどでした。私たちは少しずつ募金をして、新しいものを買って先生の誕生日に差し上げました。先生は大喜びされて、早速その場で着られ、広い教壇を端から端まで歩いて見せてくださいました。その嬉しそうな笑顔は忘れられません。」

1920 年代から 1930 年代の手記には「庭で四つ葉のクローバーを探した」こと、「港に船が入ってきたときの風景」などが思い出として数多く記されています。東山手の正面の庭

での思い出だと思います。

第三代の校長はアンナ・ホワイト先生（1920年着任）です。在任中の1920年代は幼稚園の廃止、幼稚園師範科と神学科の合併などたくさんの困難がホワイト先生を待ち受けました。志願者の減少と教員不足がこの直接の原因でした。また米国の宣教師を派遣していた婦人外国伝道協会（WFMS）の財政難も重なりました。名古屋と仙台にある系列女子校は廃止となりましたが、活水は存続の決定がなされたのです。1929年にこれまで専門学校だった活水女学部は高等女学校卒と同等の学校と認められ、教員資格認定試験が免除されることになりました。

1930年代以降、日本の軍国主義が高まり、宣教師の強制帰国や残った日本人教員の給与支払いが滞る数年間を活水学院は戦争が終わるまで経験します。

この激変の時代に生徒だった1929年卒業の鶴田千代子さんの文章から紹介します。ですます調の「敬体」ではなく、である調の「常体」が原文ですのでそのままお読みします。

「県立だけが良い学校だと信じていた。当時の私には（活水は）問題にならなかった。市内なら進学を許可するというので、仕方なく英語の勉強を決心した。（中略）

学生時代、四年間（予科一年、本科三年）の聖書の授業、礼拝を通して、また宣教師の物の考え方、生き方を肌で受け止めながら、いつの間にか、神の前に立つ人間の姿を示され、人は平等であると知り、その一人一人に注がれる神の愛を信ずる者に変えられて、キリストに出会ったことは、まさに、活水と私との関わりの頂点であろう。最上の宝を得た喜びは、他の何物にも代えられない。

思いがけなく、社会人第一歩も、母校で踏み出した。女学郎の英語教師である。名校長ホワイト先生のもとでの七年余は、充実した、実り多い年月であった。昭和一〇年（一九三五）頃、家政科志願者が増加し、教授陣の充実が必要となった時、英文科卒業生の私が選ばれたのは不可解という他はない。昭和一三年（一九三八）夏から三年間の留学が決定した。その三年目の冬、あの太平洋戦争がはじまったのである。この時くらい、人の無力を痛感したことはない。帰国の可能性が日毎に薄らぐような不安の時期が、原爆による生と死の岐路であったとは、考えもおよばなかった。家族全員を原爆に失い、弟を沖縄の戦いに奪われて、恋しく、苦しい心の支えは、ひたすらに香水へ帰ることであった。

昭和二三年（一九四七）、九年振りに見た長崎は、薄暗く沈んでいたことを覚えている。活水は汚れ、壊われ、やはり暗かった。しかし不気味に抜け破れよじれた窓を、西校庭から見つめていた時、「活水は建物ではない。精神なのだ。」と気づいた瞬間、明るい光が差し込んできた。

仕方なく関わったと思っていた活水は、私にとって誇りであり、悦びであり、すべてである。活水を取り除いたら、私はない。母校が質も、量も、ともに最高を目指して、発展し続けるよう祈って止まない。」

最後に現在の在校生の手記を紹介いたします。これまでの時代とは異なる困難が今の生徒・学生にはあります。

鶴田さんが「明るい光が差し込んできた」と記されていますが、現在の活水在校生も同様のことを経験しています。

次に今年 11 月 12 日に大学のチャペルアワーで証をした松葉瀬亜紀さんの話を紹介します。松葉瀬さんは鎮西学院高校の出身で、現在看護学部看護学科に所属しています。(この部分は 2025 年春の学院報“Living Water”掲載予定のため削除します。)

卒業生と在校生の手記は、波のように繰り返して襲う困窮や困難、辛い体験に対して、大きな希望と喜びが活水の学舎で学んだ生徒や学生にはあったことを記しています。キリスト教の教育が、様々な壁に突き当たっても「誇り」として本人を照らし、激励したのです。

活水学院のモットー「知恵と生命(いのち)の泉—主イエス・キリスト—に掬べよ」は見えない教育精神のなかで「隅の親石」としてしっかりと据えられています。

私たちはこのモットーと活水という名前に謙遜で、しかししっかりした「誇り」をもち、神さまに頼り、導きを信じ、次の一年間を希望と新しいことに挑戦する勇気を与えられ、歩んでいきたいと思えます。